

【翻訳】

## アンドルー・ゴードン「生まれ変わる日本」

Japan Reborn

長澤 淑夫

Nagasawa Toshio

**要旨** 敗戦と占領下の民主化、平等化の過程で、日本では激しい労働運動が展開された。普通の市民が街頭に繰り出し、左翼政党に加入し、労働現場では生産管理が行われた。こうした事態に直面した政府とSCAPは運動を抑圧する方向に転じた。しかし、その後、組合運動は復活し、50年代も労使の激しい対立が続き、末にはそのピークを迎えた。今では想像することが困難なこうした対立の後、労使協調組合が主流となり、高度経済成長下、日本的労使関係が安定的な生産を支えた。こうした事態の典型として、日本鋼管の労使関係を中心にみると、三つの組合運動の潮流が存在し、対抗したが、最後に協調的組合派が経営側と協力し、戦闘的な運動を抑えつつヘゲモニーを握ったと把握できる。こうした職場の変化は、労働者の利益を反映した形で展開したが、民主主義の幅を狭める結果となった。(アンドルー・ゴードン『豊かさの代償』Andrew Gordon, *The Wages of Affluence: Labor and Management in Postwar Japan*, Harvard University Press, 1998 第1章)

8月15日、天皇は日本の連合国への降伏を伝えるラジオ放送を行い、臣民を驚かせた。8年前、日本の支配層は日中全面戦争を開始した。「鬼畜英米」による残虐な支配からアジアを解放する偉大な勝利のための犠牲を、支配層は国民に絶え間なく要求した。大東亜共栄圏の名において、何百万もの人々が全アジアで殺され、300万人の日本人が死亡した。形式ばった言葉にもかかわらず、天皇ヒロヒトは破滅的な戦争が終わり、日本が完全に打ち負かされたことをはっきり述べた。多くの日本人が後に回想するように、再生の瞬間としてのこの8月という月は、過去の経験と価値の信頼がなくなった瞬間、個人にとっても国にとってもまったく新しい進路が描かれた時であった。これに続く数年、国内の危機と外から押し付けられた改革という先例のない文脈において、数百万の人々は民主主義と平等という新しいビジョンの実現のために闘った。

中村コーゴの8月の記憶は、戦後の民主主義にかかわるこうした物語を、力強く呼び起こす。中村は1924年に宮城県の村に生まれた。小学校を出た後、1938年に東京に出てきた。村役人だった父親の仕送りで工業高校に通った。彼の勉強は、最初は弾薬工場への徴用で、次には徴兵によって中断された。1947年に日本鋼管に採用され、中村はすぐ組合の活動家になった。彼の語りは、戦後マルキストや近代主義者の共通の言葉によって形成され、繰り返し語られたことにより磨きをかけられた再生の典型的な話である。<sup>(1)</sup>降伏のとき、「私やすべての日本人を包んでいた天皇制は閉封された。民主主義はまったく新しい経験と概念だった。1945年8月は精神的にも、イデオロギー的にも私にとって新しい出発だった。その時そう感じたし、今でもそう感じている。」(1991)<sup>(2)</sup>

中村は民主主義を戦後のまったく新しい経験と呼んでいるが、知識人やジャーナリスト

から工場労働者や小作人にいたるまで、戦前の多くの日本人は19世紀後半から1930年代にかけて民主主義の重要な経験を蓄積していた。占領改革はそうした活動家を再結集させ、中村のような初心者と手を結ばせた。改革は民主的で平等な政治システムを支える選挙民を大いに拡大した。

物資の不足は、こうした新しい活動に特に緊急性を与えた。戦後の数年、何百万の日本人は飢えに直面し、数千人は実際餓死した。<sup>(3)</sup>広島、長崎は原爆で、その他の都市も空襲で破壊されていた。インフレは猛威を振るった。会社にとっては原料を加工するより、闇市でそれを売ったほうが利益がでた。多くの生き残った工場設備は無為にはっておかれた。一人のアメリカ人の回想では、「戦後の数年間、憂鬱な妖怪のように、すさまじいインフレが日本を覆った。1949年ころ、つまりインフレが根治されたとき、物価は4年間で150倍になっていた。」労働者はキャベツと着物を交換するため田舎に向かう列車に殺到し、そして「食べ物を買うために着物を脱ぐことは、最初、蛇の脱皮に、つぎに涙を伴うタマネギの皮むきに喩えられた。」<sup>(4)</sup>

1946年の春まで、不作と麻痺した配給システムは深刻な食糧危機を生み出した。1946年に、食費は平均的家計の68%を占め、小学生の平均体重と身長は1948年まで下がり続けた。<sup>(5)</sup>普通の市民が組合に入り、左翼政党に参加し、街頭に繰り出していた。東京では、何十万もの人々が1946年のメーデーのため皇居前広場に集まり、民主主義と米を要求し、2週間後、いわゆる食糧メーデーに再び集まった。あるグループは米を探して軍の貯蔵庫を襲った。数十年あとで、飢餓から繁栄への戦後の歩みについての多くのスペシャル番組を、年配の日本人は痛みを伴う思い出とともに見ていた、それは予想通り1945、6年の大衆デモと栄養失調で腹の膨らんだやせた子供のシーンで始まった。不信と困惑とともに若者はこれを見て、「私の国じゃないみたい、バングラディッシュみたい」というかもしれない。<sup>(6)</sup>

連合軍最高司令長官（SCAP）ダグラス・マッカーサーのオフィスを通じて、アメリカは日本を数年間支配した。この頭文字は彼と彼の組織をともに意味した。1947年までSCAPは日本を非軍事化し民主化することに専心していた。経済の不調はほっておかれた。大衆運動は歓迎されたか、すくなくとも容認された。日本の古い支配層のメンバーは彼らの権威を保とうと戦った。彼らは抜け目のない強い意志の外交官吉田茂によって導かれた。彼は上からのアメリカ革命を怒りと驚きで見ていた。彼とその仲間がSCAPは共産主義者によってのっとられた、と非難し、吉田はマッカーサーに「日本を赤くする」つもりかと聞いたといわれている。<sup>(7)</sup>

吉田首相は最初、補助金を通して経済を刺激しようとした。彼と彼の前任幣原喜重郎は戦時契約の支払いを実行し、それを企業が平和時の生産のために投資することを期待した。しかし企業は、そうするかわりにインフレで急騰した原材料の買いだめと再販売にそれを使用した。アメリカの圧力の下で、政府はついに1946年の秋には補助金をやめた。しかし、インフレは亢進し、生産は減少し続けた。当面の危機を振り払うため、政府は傾斜生産方式を実行した。これは原料と資本を石炭と鉄鋼に集中するもので、1948年まで成功した。経済は50年代までぐらつく土台に立ってはいたが、縮小生産とインフレの危機はそらされた。<sup>(8)</sup>

革命への希望と恐れとともに経済危機はこの時期の日本の特質だった。中国では共産党

が権力を握り、ヨーロッパでは、1945年後半、まともな観察者はアメリカ式生活—すなわち私企業—の信奉者は負け組であると宣言していた。<sup>(9)</sup>ただ振り返ってみれば、そうした予言は、復興を引き受け、そしてより穏当な改革の企図における同盟国をみつけようとするアメリカの意思と能力をあきらかに読み誤ったものではあった。1946、47年にアメリカがマーシャルプランでそうした方向に動くにつれて、この方向に変化してゆく政策は、日本における人々の対立の有り様を同様に形成した。

アメリカ人は明瞭な初期のメッセージを送り、民主主義は新日本の基礎であるべきだとした。核になる改革は憲法である。憲法は1946年の冬に占領官僚の委員会で書かれ、活発に議論され、帝国議会（新憲法がこれを置き換えるまで依然として存続していた）で議決された。そして11月に公布され、47年の5月3日に施行された。

戦後の憲法は天皇の地位を絶対的な王権から人民統合と国家のシンボルへと格下げした。憲法は、信仰、集会、言論の自由のようなアメリカの権利章典の市民的自由を含む一連の基本的な人権を、日本人に認め、権利概念を社会的領域へと大胆に拡大した。新憲法は能力に応ずる教育への権利と健康で文化的な最低限の生活を保障した。労働への権利、団結し、団体交渉する権利を保障した。性別、人種、信条、社会的地位、門地による差別の禁止、そして女性に結婚、離婚、財産、遺産、結婚や家族に関するその他のことにおける平等の明示的な保障を与えた。最後に、その9条は日本人に「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」ことを命じている。

日本のエリートはこうした徹底的な保障に驚いた。日本政府が自らの推薦として人民にこれらを提供することを、アメリカが主張した時に特に驚いた。しかし、憲法案は人々の熱狂的な歓迎を受けた。公的に認められた目標や理想として、その野心的な条文は現代日本の制度と議論に枠組を与えている。

SCAPの改革者はこの国の基礎的な法の改訂を超えて進んでいった。抑圧的な「思想警察」を解散し、しばらくの間国家の警察組織を非中央集権化した。彼らは共産党のメンバーを獄中から解放した。事実、アメリカで当時可能であったものより広範囲な政治的意思表明を許した。所有権と財閥家族（三井、住友、安田、岩崎、浅野その他）による持ち株会社の支配を取り上げながら、財閥を攻撃し、大企業のいくつかも解体した。改革者は組合を勇気付け、アドバイスを与えた。最初、組織化の巨大な動きとストライキを歓迎した。本質的には地主の土地所有を解体し、自作農を創出しながら、農村の社会的経済的権力の配分を革命化するプログラムを押し付けた。こうした徹底的な方法は経済的社会的権力配分と思想の様相を変化させた。そして民主主義の熱狂が日本を襲った。民主主義と平等のプロジェクトは、それらの提唱者によって非常に拡大した事柄として理解された。つまり、それらは土地改革と投票以上のものを意味した。多くの人びとにとってそれらが意味したものは—そしてこれは約束であり脅迫でもあった—人間の魂の再形成であった。再革新、再建、変革の語りは日本中に響き渡り、それは職場でも明瞭に聞くことができた。

労働の個別の組織化は降伏の数週間後に始まり、1945年の10月にアメリカが組合に対する支持を表明したとき、組織化の奮闘はぐっと進んだ。組合員数は10月の5千人から1946年12月の5百万へと上昇し、国の成人賃金生活者の40%を越えた。欠乏と労働者の大衆的怒りにあおられ、組合の活動家は戦術的に戦闘的で、しばしば目的においてラディカルで

あった。1946年6月中、新規に組織された15万7千人が、233箇所の「生産管理」に従事した。賃金と職場の民主化要求が拒否されたとき、彼らは経営者を締め出し、工場、鉄道、鉱山を経営した。<sup>(10)</sup>この戦術によっていつも組合はその要求を獲得した。そしてそれは革命を含意するものであった。労働者は私的所有と経営権という基礎的な観念に挑戦したのだ。<sup>(11)</sup>

革命の開始に労働者は近づいたが、彼らはアメリカの反対に打ち勝つには不十分だった。占領者が軍国主義、封建主義と呼んだものを根こそぎにするためのラディカルな改革とともに、古い秩序を攻撃したが、資本主義的民主主義としての彼ら自身のイメージにおいてこの国を再建しようとした。1946年5月、SCAPは食料メーデーとしての大衆デモと同じく生産管理を非難した。自信に満ちた新内閣はさらなる生産管理を抑圧した。生産管理は1946年春の毎月30万人を含む50の事例から1947年初頭には5、6千人を含む毎月25程度の動きにまで急速に衰えた。<sup>(12)</sup>

労働側は戦術を変えることを余儀なくされた。しかし組織化への情熱は衰えなかった。日本にいる人びとは大きく変化する内外の文脈において戦後民主主義の意味を確定するために懸命に努力した。彼らの活動によって、戦後の15年間はストと同様思想の戦いによって区切られるユニークな闘争の時代となった。

40年代と50年代においては、組合における労働者の活動の支配的ポジションはラディカルなものであった。彼らの最終的な目標は社会主義的、共産主義的な革命であった。彼らは組合を新社会のもっとも重要な建設的ブロックとして、社会主義、共産主義政党に連合するものとみていた。産業レベルでは、こうした組合主義者は最初、共産党に支配された産別会議に加わった。産別が崩壊したとき、1950年、個々の組合は総評に参加した。典型的には従業員のニーズを反映しつつ、生活費に応じて増大する年間賃金を、要求した。職場と企業の中核における積極的行動を通じて、組合のリーダーは、工場や企業内の人員配置の決定に関する従業員の拒否権と、日々の作業上の代弁者であることを求めた。つまり、経営権の正当性に挑戦したのだ。

二番目の重要なポジションは1919年に設立され、戦前の労働運動の協調的な部分のメッセージを戦後に伝えている、由緒ある総同盟のそれである。名前とイデオロギーの上では、総同盟はアメリカの戦後労働運動の主流と似ている。その加盟組合は資本主義社会の枠組みを受け入れ、その役割を、資本主義内部の労働者保護と考えている。彼らのゴールは革命的でないが、総同盟の戦術は戦闘的でありえた。彼らのリーダーは、労働と経営は資本主義システムが生き延びることに共通の利益があるが、誰でもが考える相違が両者を二つのサイドに分け、こうした相違は信頼ある交渉によって通常は解決される、と論じた。

生産管理闘争が弾圧された後、両派の何千もの組合はより伝統的な戦術に移行した。彼らは増大した莫大な賃金を勝ち得たし、以前は経営側にあった事柄に実質的な意見を反映させる契約も得た。産別はこれを駆動させ、1946年「10月闘争」に頂点を迎えた。その時全国で参加者18万人を含む100以上のストライキが起きた。こうした行動は職の保障と被雇用者の必要を反映する賃金システムを勝ち取った。それから、産別とライバルの総同盟の両者は、吉田内閣のひとりよがりな政策と経済の崩壊に対する怒った人民に突き動かされ、1947年の1月に、600万人を動員する2・1ゼネストを計画した。ストへの数週間、産別と総同盟の共産党主導の統合闘争委員会のメンバーは革命前夜にいと信じていた。

彼らの期待ははずれた。最後の瞬間、1月31日の午後、マッカーサーは委員会のリーダーにスト中止を命令した。これは反封建革命の使徒から資本主義の回復の支持者へと転換するアメリカの巨大な一歩であった。一般組合員にマッカーサーに逆らうことはできないことを分からせながら、ストの組織者はこの禁止に従った。<sup>(13)</sup>

この巻き返しにもかかわらず、組合は次の3年間は元気なままだった。流産した2・1ストの6日後、産別、総同盟、そして改革志向の経営者組織である経済同友会は経済復興委員会を正式に発足させた。これは統合された労働運動への新しい枠組みを提供した。ストは依然として頻発し、労働者は新たな組合を組織し続け、組織労働者は1949年にそのピーク56%に達するまで増え続けた。

しかし、日本のことわざが言うように、二つの組合は「同床異夢」であった。経済復興委員会は1年後に崩壊した。ひき続く経済成長にもかかわらず、1948年半ばまで、労働運動は守勢だった。48年7月、マッカーサーは労働法の見直しを示唆した。そして吉田内閣は公務員のスト権を否認する新法に熱心に取り組んだ。1949年、SCAPは経済の回復のために厳しい緊縮財政を強いるドッジプラン（その設計者アメリカ人企業家の名からこう呼ばれた）を実行した。緊縮と賃金引下げを企業へ強いる国家の圧力によって、何千もの労働者の首切りがおこった。そして組合の不成功に終わった夥しい抵抗を引き起こした。1950年6月、アメリカは、共産党員かそのシンパとみなされた1万2千人を解雇するように日本政府に命じ、政府は喜んでこれに従った。1950年の終わりまでには、組合員数は670万人から580万人にまで減少し、組織率は10%近く減った。<sup>(14)</sup>

日本の組合は再び、徐々に再編され、50年代の終わりには対立のピークに向かった。新たに設立された総評は日本の批評家を驚かせ、産別に対する協調的組合になるとはじめ期待していた占領者を困惑させた。総評はかわりに国政においては左翼の社会党を支持し、産業レベルでは攻撃的に賃金交渉を行い、職場においては日々戦闘的であった。

この精力的で変化に富む労働者の反乱に直面した経営者は応答において分裂した。ある強硬派は占領改革に決して折り合いをつけず、つまり彼らは弾圧されるべき脅威として組合を扱い続けた。<sup>(15)</sup>他は、特に独占的な企業では、しばらくはラディカルな組合と平和的な関係を持った。<sup>(16)</sup>しかし、多くの経営者はラディカルな組合主義者を攻撃し、労働力を管理し経営者を助ける協調的な分子を育てる戦略を探った。そのようにしながら、彼らは戦後組合主義の第三の主潮流に力を与えるように助けた。

50年代に現れ、その後確固たるものになったのは、この改定された協調的なポジションであった。その支持者は労働者と経営者の利益は基礎的には同じであり、経営者が通常雇用者と会社の相方の互いの利益の上で行動することを当然視していた。ただまれな場合、つまり経営者が常ならず陳腐で自己中心的な時、組合はタフな交渉において対立する必要があるだろう。組合の第一の機能は企業のために労働者を動員することに協力し、会社がかうまく繁栄するように助け、それによって結局は従業員に奉仕することになる。こうした組合主義は最初、国内外の市場でシェアを競う私企業に表れた。批評家はそれを真の組合主義に似せた究極の墮落形態だとして非難した。賛同者はこれこそ完璧なプラグマチックな日本的労使関係であり世界のモデルと賛美した。

この協調的な組合主義の新ブランドは事実上、相対的に戦闘的な戦前や戦後直後の協調的ポジションにも、ラディカルなビジョンに対しても勝ち抜いた。しだいに、経営者は組

合とよい関係に入っていた。70年代後半にいたるまで、彼らの政策の賢明さに自信を持ち、日本的経営の側に立ってヨーロッパや他のアジアに向けて改宗を勧めた。<sup>(17)</sup>国内での基礎が固められ、日本の企業支配システムはいまやグローバルな達成を見た。

英語圏で語られるこの話の伝統的な語りは、戦後直後の日本の労働力をめぐる戦いは短期にたやすく勝利されたというものである。ラディカル派は非現実的で、ドグマチックな部外者で労働者の間でも表面的な支持だけがあった。彼らは後代に重要な意義を残さなかった。<sup>(18)</sup> 穏健派は実践的で先見の明があった。彼らの勝利は不可避で、彼ら自身にとっても、後の世代の日本人に、さらに世界にとってさえ幸福なことであった。

これは近視眼的見解である。これは戦後直後の組合の挑戦の遺産と期待、つまり従業員間の先例のない平等の探求と職場と企業決定における参加の新形式を理解していない見解である。この推進力には広範な魅力があった。最終的にはこの挑戦は短く終わり、そしてこのことは日本の戦後民主主義の範囲を狭めた。つまり負けたとはいえ、大志を持った組合の40年代と50年代の挑戦は重要な衝撃を持った。すなわち経営者と彼らの組合は戦後直後のアジェンダの一部を新協調的秩序に組み込んだのだ。

川崎市の工場は戦後労働運動のもっとも活動的な場所であった。それら工場は運動の性格を理解するためのユニークで優位な場所だった。ここは日本の知的世界、メディア、政府から広範な注目を受けた。横浜の占領軍の本部と東京のSCAP本部には生まれ、川崎の労働はアメリカ人からもまた注目された。

もっとも精査されたこの都市には日本で二番目に大きい鉄鋼企業、日本鋼管があった。日本鋼管の工場での出来事は日本の政策に影響を与えた。1946年1月26日、日本鋼管鶴見工場組合のメンバーは荒々しい交渉において会社の社長と財閥のリーダー浅野良三を痛めつけた。この事件によって4人の大臣は生産管理を違法化する1946年2月1日の決定をおこなったが、SCAPは直ちにこれをひっくり返した。<sup>(19)</sup> 日本の支配層にとって、この事件は占領の最初のヶ月において明らかに無制限なアメリカによる日本の組合への支持を示すショッキングな事件であった。

二十世紀初頭まで、川崎は静かなところで、指のような細い領域が、短く湿地状の海岸線から数マイル伸びているところであった。主要なごみ埋め立て計画が海岸にいくつかの巨大工場の建設を許した時に工業センターとして出現した。日本鋼管に加え、これらの地域は浅野財閥の造船所と鉄鋼所が鶴見川を渡って横浜に伸び、東京電気会社（1939年にはライバルを合併し東芝となった）のバルブ工場も含んでいた。第二次世界大戦の前には、川崎はタフで汚い場所としてのイメージとともに、日本の主要なブルーカラーの街のひとつになっていた。1943年12月、戦時中のピーク時には人口は1933年の二倍を超え39万人になった。<sup>(20)</sup>

日本鋼管は1912年二人の大学のクラスメイト、その時まで八幡製鉄の技術者で、技術を提供した今泉嘉一郎と義父浅野総一郎による資金を提供した白石元治郎によって設立された。会社の設立神話によれば、この二人の男は日本において私有鉄鋼会社が繁栄できるという彼らの地元の人が紹介した夢によって動かされた。事実、官営八幡工場に対する依存と競争が日本鋼管の全歴史の主題である。<sup>(21)</sup> 第一次大戦の終わりまでに、川崎工場は数千人の鉄鋼労働者を雇っていた。1936年には、鉄、鋼、圧延金属を総合生産する統合工場と

して、日本鋼管はその最初の溶鉱炉に火を入れた。第二次大戦の終わりまでに、川崎工場は5つ溶鉱炉、1万8千人の労働者を擁して、ピーク時には230万トンの年間生産を達成した。そうして、1940年、日本鋼管はその圧延と製板の能力を強化し、浅野財閥の鶴見鉄鋼所と造船所を吸収し、顧客を獲得した。

一般的には鉄鋼業で、個別には日本鋼管において戦後日本における職場の代表的で戦略的な例を見ることができる。鉄鋼の工場でおきたことは大抵の主要な工業で起きたことと非常に似ているという点で、それは代表的である。それに加えて日本鋼管の話は多かれ少なかれ他のビッグファイブ（八幡、富士、日本鋼管、神戸、住友）と同じである。意義申立人のイデオロギーを語るか、論争の結果を、あるいは労務管理や技術上の革新を語ろうがこのことは真実である。

この産業の代表的性格は偶然ではない。それは鉄鋼業から始まった政治的経済的衝撃に由来する。戦後ずっと、鉄鋼業の重役たちは「鉄は国家なり」という格言を好んで引用した。数十年にわたり、鉄鋼における賃金決定は、労働編成や品質管理上の革新同様、他の産業の基準になった。同様に、後に労使協調組合を日本中に普及させた新政治的提携へと向かう道に、鉄鋼の組合は進んだ。

一企業としての日本鋼管の戦略的位置は全体としての鉄鋼業の占める戦略的位置ほど明らかではなかった。ある点では日本鋼管は、1912年の設立以来、10年早く生産を始めていた巨大な国営八幡製鉄の後を追っていた。戦後、八幡製鉄所は私企業になったが、常に大企業中の大企業であった。トップの重役から溶鉱炉の労働者まで日本鋼管の人々はもっと働かざるを得ないナンバーツウのメンタリティを育んだ。連続熱延設備やアメリカ的な監督システムの導入のような鍵となる技術革新について、日本鋼管は八幡の数年後を追った。しかし、他の鉄鋼新技術では先導した。同じ経営策と労働側の反応も学ぶことができた。

それにもかかわらず、日本鋼管は戦略的最適地を占めた。学術とジャーナリズムの中心地東京と占領司令部に近い川崎という立地は綿密な調査を刺激し、1940年代から今日に至るまで観察者の記録を残した。それに加えて、1959年の日本鋼管と富士製鉄における49日ストは鉄鋼における戦闘的な組合の最後の騒動であった。その結果、鉄鋼と全経済における協調的組合優位への道を開いた。

1940年代50年代における個々の鉄鋼労働者の人生を説明することは、戦後日本の労働運動に対するわれわれの評価を豊かにする。こうした労働者の対立する見解において、50年代の激しい職場闘争を起こしながら、対立する分派と諸イデオロギーへと結晶する「真の」組合主義の複合的な有り様を理解することができる。

カミムラ・ヒデジは1915年に生まれた。彼の正規教育は6年生で終了した。小作人としての父親が受けた屈辱の記憶は、彼の社会的意識を強力に形成した。毎年12月には彼の父は野良での仕事を離れ地主の所に小作米を届けた。それを手渡ししながら、彼は低くおじぎをして地主に礼を言った。1992年に、65年前のこの儀式を見たことと、「子供心に『なんて地獄が続くのか？なぜ地主に感謝するのか？』と考えながら、私にはこうしたことが矛盾に見えた」ことをカミムラは覚えている。<sup>(22)</sup>

カミムラの最初で唯一の工場主は日本鋼管であった。1935年に工場に入り、金属セクションでクレーン作業員として働き、石炭と鉄鉱石の積荷を降ろした。やせた若者である彼は

最初、12時間交代と重労働、暑さ、油に圧倒された。彼もまた頑強で誇り高かった。1941年、彼のセクションで彼と15人くらいで、溶鉱炉の労働者と同等の出来高割り増しを要求し、ある夜のシフトの最初、彼らは歩いてゲートを出て行った。補助セクションのチーフに大声で怒鳴られ、彼らは真夜中ころに仕事に戻った。割り増し率は上がったが、活動家の純増はないままで、個々人の基本給は罰として引き下げられた。

カミムラの不満感は戦後も残った。「会社のヒエラルキー上の自分の地位に心底不満だった。もし不平を言い続けても、押さえつけられただろう。私はそれを心底変えたかった。」彼は横暴な現場監督と副現場監督、工員である組のボスに不満だった。生産労働者に比べて高い地位にあるホワイトカラーの職員を嫌っていた。「そこには大きな差別があった。私はホワイトカラーの連中に対して大きな反感を持っていた。」

カミムラの運動へのコミットメントは長年の職場の経験に由来する。精神的イデオロギー的再生の瞬間としての45年8月を経験した若者である、中村コーゴのコミットメントはより知的な基礎を持ち、戦時体制による裏切りの感覚によって拍車がかけていた。1945年から47年にかけて東京に暮らしながら、彼は川崎駅前の闇米を売るような変な仕事や両親の仕送りで生活していた。彼は常に貪欲な読書家で、古本屋をぶらつきながら、新しい考えを探し、今もむさぼるように読書する。彼は河上肇の戦前経済に関するパイオニア的なマルクス主義の著作と、自由主義的信念によって1937年に京都大学を追われた滝川幸辰の法に関する著作に深く動かされた。「私は河上に経済上の問題を、滝川には政治的権利について教わった。私自身の意識、理解、確信、言い切る能力を発展させた。こうした本は貴重だった。今でも本棚にそうした本は読んだ順に並んでいる。それは物理的な知的日記のようなものだ。誰かがそれを動かすことは嫌である。他の本と混じり、切り離されるなら、私は本を図書館には寄贈しないだろう。」<sup>(23)</sup>

中村は1946年に社会党に参加した。47年に日本鋼管が労働者を募集しているのを聞いた時、彼は応募したが、高い学歴がない生産労働者を会社は求めているという理由で、工業高校出の彼は就職を拒否された。三ヶ月後、学歴を隠し再応募に成功した。彼は直ちに組合運動に身を投じた。そして彼を雇った労働セクションで従業員を駆り立て、彼は47年9月組合の役員選挙に立ち、教育部長のポストを得た。中村は3ヶ月だけ日本鋼管のフルタイムの従業員だった。彼は次の13年間をラディカル派の専従として過ごした。

中村のけんか腰の性格は並外れであった。彼はまた会議の進行に非常にやかましかった。彼の仲間の労働者が冗談で言うには、中村がそこにいたときは組合会議が3倍長かった。しかし、平和と民主主義、社会主義への理想主義的コミットメントにおいて、彼はラディカルな潮流の典型であった。当局が民主的に振舞うことを強いられ、時には情熱をもってそうしていたこの時代の別の典型的な象徴は、中村を雇った人事部長の支持だった。彼は若者のラディカリズムを知っていたし、組合の大志を応援しさえした。

戦後初期の組合運動にあって三番目の鉄鋼労働者の活動家、工藤シンパチは経験においてもイデオロギーにおいても明白に違っていた。彼は会社と協調しようとした組合主義者の初期の流れの典型である。しかし、場合によっては戦闘的な行動を支持した。彼はのちに、時には協調的リーダーがあまりに譲歩しすぎるとこぼしながら、60年代の超協調的な流れと運命をともにするだろう。

カミムラのように、工藤は1918年北日本で小作人の家に生まれた。彼は小学校だけを終

えた。14歳ごろ、小作地で働き出し、数年そこにとどまった後、1938年20歳の時、日本鋼管に入った。彼はそれから徴兵され、39年から42年まで中国戦線で過ごした。その当時、軍は高い技術要員として彼を指名し、日本鋼管に送り返した。彼は戦争の終結時と占領中ずっと川崎工場に留まった。結局、職工長の地位にまで登った。

工藤は1946年には川崎組合の立ち上げを助けた。そして彼は1949年まで組合運動に活動的だった。彼はそれから作業チームのボスに昇進し、そしてより若い一般労働者が組合をリードすべきという信念で組合のポストを去った。後に工藤は自分を社会党の左派あるいは共産党による組合支配と会社による搾取の両方に反対する「真の組合主義者」と呼んだ。「組合の仕事と思われることは、私の考えでは、労働の成果に対する労働者の取り分を増やすことである。賃金交渉は私にとっての核心的事項である。・・私は、会社は自己本位で、ストを避けるほどには十分な賃金の増加を与えていないと感じていた、そして私は他の協調的組合主義者にくらべてもっと組合は会社との距離をとって欲しいと思っていた。」<sup>(24)</sup>会社と左派組合の両者からの独立という彼のこの主張を、工藤は行動においては実現できなかった。50年代の初め、彼が後に会社本位と呼んだものと戦うための積極的な計画促進に費やす時間とエネルギーをほとんど残さずに、彼は組合内でとりわけ共産党との戦いに取り組んだ。

一方のカミムラと中村のポジションと他方の工藤のポジションの間のどこかに、「労働組合主義者」と自分を呼ぶ磯辺トシエがいる。日本ではどこでもしばしば自身のスタンスを「真の」の組合主義として定義する戦いを廻って、組合政治は回ってきた。磯部は社会党員中村とカミムラを避けた、しかし、工藤と比べれば、組合主義者としての彼の利害と会社のそれとの間に、より鋭い一線を、彼は引いた。

雪国新潟の裕福な地主の息子である磯辺は中学の軍国主義教育を思い出している。そのおかげで1938年彼は19歳の時、志願兵となった。一年の訓練後、飛行場や上陸防御陣地を作りながら、中国と沖縄を含むさまざまな島で1945年の終わりに日本へ帰るまでの6年を過ごした。中村のように、磯部も戦後「日本に何が起きたのかを理解する必要」に取り付かれた。<sup>(25)</sup>戦争前の近くの村での小作人の抗議の記憶に影響され、日本の惨状を説明し未来へのガイドとしての社会主義に、彼は注目した。都市には食料が見つけれなかったので、彼は1946年の初め自分の農家に帰り、いとこの東京の大学生から送られてくる本を読みながら、一年間自分で勉強した。農地改革後、磯部は価値の下がった父の土地を継ぐ期待を退けて、1947年10月、友人の紹介を通じて、日本鋼管川崎工場の二番パイプの圧延工場で溶鉱炉労働者としての職を得た。

磯部は小柄で（5フィート2インチ）完璧な姿勢、素早いステップの男だった。彼は回想する。「これが鉄鋼工場での最初であった。私は驚いた。溶鉱炉からは千二百度の熱。これは真の男の仕事だ、しかし、私が軍隊を生きぬいたとすれば、それに対処できると考えた。日本鋼管に入った時は、復興プロジェクトのためのガスパイプの生産で忙しかった。」磯部は、6ヶ月は静かに彼の仕事をしておこうとしたが、すぐ組合に引き込まれたという。「我々は食料を要求していた。経営は基本的に職場になかった。未来に対するビジョンもなかった。」彼は1948年春、地方的な組合の役員選挙に立ち、フルタイムの仕事しながら第2圧延セクションにおいてさまざまな組合の仕事を5年間勤めた。1952年には彼は専従に選ばれ、そしてついに1964年から68年までは組合の副委員長を務めた。

磯部は、労働者の間に統一を作り出すことと労働時間、合理的な人員配置、公正な利潤の配分を求めながらの賃金の上昇により労働者を守ろうとする使命感によって形成されるものを、独立組合主義だと考えていた。彼は1948年から52年までの庄延工場における日々を、通常の組合の会議、作業量についての不満、交渉、さらなる会議として描いている。彼の使命を実現する唯一の方法は、一般労働者に語り切らせるような勇気づけによって戦闘性を作りながら、下から組合を活性化させることであると感じていた。50年代、彼はこの目標達成へ向かって進もうとしていた。

これら4人は異なる種類の複雑な作用を通じて組合運動に入った。子供時代の屈辱と引き続く労働生活がカミムラの行動への意思と正義の怒りの感覚を作った。自学によって強められた突然の政治的目覚めが中村を作った。労働経験と若い熟練の工場リーダーとしての地位が工藤を鼓舞し、戦後民主主義へ意味を与えようとする情熱と若い理想主義が厳しい労働経験と結びついて磯辺に火をつけた。社会的には大学出の経営者の世界から遠く離れ、そしてしばしば彼らに憤慨し、こうした男たちは戦後初期の10年間、職場闘争において中心的人物であった。彼らは、日本鋼管の戦後直後の組合運動のリーダーとして活動するほど十分に経験を積み、頭角を現したわけではないが、こうした集会に参加する中で、ストに投票し、身分制度と戦っていた。彼らは物質生活を改善し、社会的尊敬を得、戦後日本において民主的実践の新しい将来性のある様々な伝統を形成する道具として組合を力強く理解した。

### 想像できないものの想起

経営者の一員としての彼の経歴の回想として、折井日向は、戦後直後の争議の重要な回顧的見解を書いた。

（交渉中）交渉のテーブルに座っている組合と経営者の委員会代表に加え、組合員の大群がいた。それは一種の大衆団交で、おそらく集団の力で経営者を怖気づかせる戦略だった。しかし、他方、当時の組合のリーダーはまだ十分な権威を確立しておらず、そして組合員大衆は組合と経営者の代表によって行われる交渉の結果を必ずしも受け入れようとはしなかったので、交渉に参加するため傍観者大衆の共通の行動があったのだ。

こうした交渉において、組合員は声を張り上げ、こう叫んだ。「労働者の食卓を見ろ、我々は何日も米粒を見ていない、味噌の味すらない水団が4、5浮かんだスープを飲むだけで、日本の工業的復興のための重労働ができると思うのか？物価は上がり続けている。配給品でさえ、2、3倍になった。一日一杯の米が欲しい。それを買う金が欲しいのだ。」<sup>(26)</sup>

折井は大学出の経営者の一員で、自称「近代的、科学的管理者」であった。彼の様な男は40年代後半とそれに続く数十年の間中、日本における多くの職場における同様な荒荒しい交渉において経営者側の前面にいた。日本鋼管の労務課の折井の部下はコンダ・マサルで、彼は妻によれば日本帝国軍最後の兵士と表現される頭の固い企業戦士である。コンダは、1959年の日本鋼管のストの最高潮時には2週間の間人事部オフィスの簡易ベットで寝たことを語る。ある日、組合は次の交渉のために120人を送ると脅してきた、しかし最

最終的には20人に制限することに同意した。ところが、夜明けには結局、120人の組合員が現れ、そしてコンダの上司はまだ到着していない。「私は彼らと対峙し、暴力を覚悟した。1945年8月、アメリカの到着を待ちながら厚木基地にいたときを除いて、私の人生の中で最も緊張したのがこれらの日々であった。」<sup>(27)</sup>

折井によって回想された1949年の日本の職場では、経営者と組合は深くイデオロギー的に対立し、彼はほぼ同等に激しく戦った。最終的に、批評家が「企業中心社会」と呼ぶ秩序が、60年代に確立するまで、50年代を通じて現場でこの対立は徹底的に演じられた。1973年まで、折井が彼の回想を書いたとき、「当時の交渉は今日では想像することが困難なほど威嚇的であった」ことを彼は指導層に言う必要を感じた。彼はこの騒々しい時代のわずか20年後、たいていの日本人はこうした激しい職場の対立を不自然とみることを理解していた。彼らは戦後初期の社会を別世界とみなすかもしれないし、どんな時代においてもありえないこととはしないだろうが、雇用主に対する従業員のこの戦闘的な行動を過ぎ去った日々適切な遺風とみなすだろう。

労働問題に関心を持つ日本の主要な企業団体である日経連のあるベテラン役員は50年代から70年代にかけての労働運動の巨大な変化を、組織労働者の主流が経営者のポジションを採用した、とすっきりまとめた。<sup>(28)</sup>日本は、企業にとってのよいことは従業員、経営者、消費者、大抵の公衆にとっても共通によいことであると、大多数の人びとが普通に考える所になった。鉄鋼の話はこの戦後の変革の核心であり、その変化は90年代の終わりの読者にとっても無関係ではないまま存続し続けている。

この根源的な日本の職場の変革が、資本家に対する労働者階級の単なる敗北以上のものを含んでいることを理解することは重要である。草の根民主主義は弱められたが、その帰還という亡霊は、経営者が労働者に実質的な利益を提供する理由のひとつである。ヘゲモニーを樹立する上で、企業は組合のアジェンダの重要な要素を吸収した。現代日本の権力構造の下位パートナーとして、組合のリーダーは、組合員の効率的な生産への動員を助け、この援助を評価する経営者は個別には組合の職の保障要求を顧慮した。

それにもかかわらず、企業中心社会が日本人の日々の生活と思考に浸透していくにつれ、何が可能で、想像することができ、また何が自然なことかと考えることを制限しはじめた。それは、広範囲な政治的諸目的と職場における要求する行動主義から、縮小しつつある統合された少数派の狭い経済的利益の擁護へと、正当な民主主義的行動の範囲を制限した。この狭まるビジョンは日本の領域を越えて重要性を持つ。この問題こそが資本主義的勝利の収支という典型的20世紀物語の中心に存在するのだ。

(ながさわ・としお 本研究科博士後期課程)

(1) Andrew Barshay, "Imagining Democracy in Postwar Japan: Reflection on Maruyama Masao and Modernism" *Journal of Japanese Studies*, Summer 1992.

(2) Interview with Nakamura Kogo, October 7, 1991.

(3) "Drastic Steps Set to Fight Food Lack" *Japan Times*, June 6, 1946.

(4) Theodore Cohen, *Remaking Japan: The American Occupation as New Deal*, Macmillan, New York, 1987, pp. 171, 179. (セオドア・コーエン著、大前正臣訳『日本占領革命：GHQからの証言』上下巻、TBSブリタニカ、1983年、上巻271頁、261頁。)

(5) 川崎労働史編纂委員会編『川崎労働史 戦後編』7-8、410頁。

- 
- (6) Comments of Japanese college students at a screening of one such program that I attended in 1989.
- (7) John Dower, *Empire and Aftermath: Yoshida Shigeru and the Japanese Experience*, Harvard University Council on East Asian Studies, Cambridge, Mass., 1979, p. 294. (ジョン・ダワー著、大窪愿二訳『吉田茂とその時代 1878-1945』下巻、TBS ブリタニカ、1981年、27頁。)
- (8) Chalmers Johnson, *MITI and the Economic Miracle*, Stanford University Press, Stanford 1992, pp. 181-182. (チャーマーズ・ジョンソン著、矢野俊比古訳『通産省と日本の奇跡』、TBS ブリタニカ、1982年、199-203頁。)、Andrew Gordon, *The Evolution of Labor Relation in Japan*, Harvard University Council on East Asian Studies, Cambridge, Mass., 1985, pp. 334-335.
- (9) Charles Maier, "The Two Postwar Eras and the Condition for Stability in Twentieth Century Western Europe," *American History Review* 86, no. 2 (April 1981) p. 327-352; A. J. P. Taylor を引用。
- (10) Joe Moore, *Japanese Workers and the Struggle for Power 1945-1947*, University of Wisconsin Press, Madison, 1983, p. 104, Table 4.1.
- (11) *Ibid.*, pp. 156-160.
- (12) *Ibid.*, p. 104.
- (13) Cohen, *Remaking Japan*, Ch. 15. (コーエン、前掲書、第15章。)
- (14) 大原社会問題研究所『日本労働年鑑 1959年版』東洋経済新報社、138頁。
- (15) Cohen, *Remaking Japan*, pp. 271-272 を参照、例えば繕桂之助。(コーエン、前掲書、下巻45頁。)
- (16) 竹田誠『王子製紙争議 1957-1960』、多賀出版、36-38頁。上田修「企業間競争と<職場社会>」、『大原社会問題研究所雑誌』、350号、1988年1月。
- (17) Andrew Gordon, "The Invention of Japanese Style Management." Stephen Berkeley ed *In Mirror of Modernity: Invented Traditions of Modern Japan*, University of California Press, Berkeley, 1998.
- (18) David Halberstam, *The Reckoning*, New York: Morrow, pp. 153-187.
- (19) 日本鋼管鶴見『鶴鉄労働運動史』、63-68頁。Cohen, *Remaking Japan*, pp. 221-222. (コーエン、前掲書、上巻334-337頁。)
- (20) 川崎労働史編纂委員会編、前掲書、85頁。
- (21) 日本鋼管『日本鋼管株式会社30年史』、1942年、21-23頁。
- (22) Interview with Kamimura Hideji, October 14, 1992.
- (23) Interview with Nakamura kogo, October 7, 1991.
- (24) All quotes from interview with Kudo Shinpachi, April 12, 1992.
- (25) All quotes from interview with Isobe Toshie, September 11, 1992.
- (26) 折井日向『労務管理20年』東洋経済新報社、1973年、i - ii 頁にみえる折井の労務管理の哲学。
- (27) Interview with Konda Masaharu, February 28, 1992.
- (28) 松崎芳伸の発言。青木慧『ニッポン偽装労連』青木書店、1989年、13-14頁。